

中外雑記

浄土

復興に動き出す被災寺院

●**浄土宗** 兵庫県南部地震は浄土宗寺院にも兵庫教区を中心に大きな災害をもたらしたが、尼崎市の東光寺に設置された兵庫教区災害対策本部には連日、宗務庁職員が交代で詰め、災害の状況調査やポリタンクの配布など被災寺院に対する救援活動を行なっている。地震発生後、実施されていた電話による被災調査がほぼ終わり、被災状況の全貌が次第に明らかになりつつあるが、被災調査をもとに二月六日から、内局、宗務庁職員、知恩院職員らがチームをつくり、共済会や一宗、知恩院などから寄せられた見舞金を持参し、一斉に被災寺院を見舞うことにしている。一月二十七日までにまとめた電話による被災調査によると、被災寺院では当面する食料などの物資はそう不自由していないという寺院が多いが、断水による水の不足を訴える寺院が少なくないという。また、本堂や庫裡の全壊、半壊など大きな被害を受けながらも、被災を免れた建物に被災者を収容したり、ボランティア活動の基地として救援活動を行なったり、あるいは遺体安置所として建物を提供したりしている寺院も少なくない。寺院の復興については、めどがたたないとする寺院が多いものの、既に建物の解体や廃材処理に動いている寺院もあり、プレハブの発注を行なっている寺院もある。徐々に復興に向かって動きつつある。

被災者の心のケアを

▽今回の兵庫県南部地震では、全国浄土宗青年会（神田眞晃会長）の素早い対応が光った。同青年会では、十八日にはいち早く大阪教区の法伝寺（山本典雄住職）に災害対策本部を設置。近畿ブロック浄土宗青年会（塩竈義明会長）に活動を委託し、募金活動、ボランティア活動の両面で救援活動を展開していくことを決め、二十一日には近畿ブロックのメンバーが兵庫県の災害対策本部に救援物資を届けるなど素早い対応を示した。同青年会では、付設機関として災害救援センターを設けており、災害救助法が適用された時点で、義援金を送るシステムをとっている。島原の普賢岳噴火や北海道南西沖地震などにも、同センターにプールされた資金を義援金としていち早く送っているが、今回の兵庫県南部地震でも、一月十九日に五十万円の義援金を神戸の災害対策本部に届けたほか、これまでに災害救助法の適用された市町村に各三十万円ずつ合計四百四十万円の義援金を届けている。二十二日には全国各教区の浄青に向けて義援金の托鉢などの活動を要請。各教区で実施されている托鉢で寄せられた義援金と同青年会の災害救援センターに集まりつつある。また連日、メンバーが被災地域に入ってボランティア活動を展開。三十一日まで神戸市や西宮市の火葬場に出向き、次々と運ばれる遺体に花を手向けたり、読経を行なうなどの活動を行なった。また被災寺院に対しては、倒壊した本堂から本尊を運び出すなど支援活動も展開している。被災地に入って救援活動を続けている神田会長は「これからも、被災寺院の要望があれば、出向いてお手伝いをさせて頂きたい」と話す。同会長は「被災者のみなさんは、今まで生きていくことだけで精いっぱいだったが、これからはどう生きていくのか不安でいっぱいだと思います。ことにお年寄りやこどもたち社会的弱者はなおさらのことに違いない。そうした人たちの心のケアが必要になってきます。これからは、日頃の教化活動の経験を活かしたこころのケア活動を行なっていきたい」としている。同青年会では十二日に災害対策会議を開き、今後の対策を検討していくという。

寺庭婦人会が一千万円を

▽浄土宗寺庭婦人会（稲葉綾子会長）は一月三十一日、宗務庁で常任理事会を開き、兵庫県南部地震の被災者への義援金として一千万円を送ることを決めた。寺庭婦人会では、こうした不意の災害への救援資金として、同会が実施する各種の大会や研修会、また各教区の催しなどで、日頃から災害救援のための「十円募金」を実施している。同会ではこれまでプールされてきた「十円募金」の中から兵庫県南部地震の被災者に対する義援金を拠出することにしたもので、義援金は一宗の災害義援金に寄託し、各教区などで実施されている募金活動や托鉢などで寄せられた義援金とともに、被災地に送られることになっている。

天台

九日に震災救援対策臨宗

●**天台宗** このたびの兵庫県南部地震の救援の対応策を協議するため、九、十の両日、臨時宗議会を招集することになった。救援費などについての補正予算の検討や、関係規定の制定、また関連既存規定の改正などのほか、被災寺院に対する宗費減免などについて審議される。三月の定期宗議会を控え、同日に予定されていた常任委員会は、十日の臨時宗議会閉会後に開かれることになった。

大護摩供で震災復興祈願

▽延暦寺の「世界平和除災招福祈願大護摩供」が、三月十三日午前十時から午後三時まで西塔峰道伝教大師尊像前広場で執り行なわれるが、今年は兵庫県南部地震のための「兵庫県南部地震復興祈願」を掲げて修されることになった。この大護摩は、昭和六十二年に世界の宗教代表者が延暦寺に集い、世界平和に向けて祈りを捧げた「比叡山宗教サミット」の趣旨を広く普及するために営まれているもの。昨年からは、各教区や布教師連盟、仏青連盟、寺族婦人連盟、福聚教会叡山講詠歌など各種団体も護摩木寄進に協力するなど一宗挙げての協賛で成果を上げてきている。この大護摩供の冥加料の一部は、難民救済基金として役立てられてきたほか、天台宗の教学財団、延暦寺一山人材養成などにも活用されてきた。今回は、兵庫県南部地震被災者のためにも一部使用されることになっている。

本山仏青四回目援訪を

▽一月二十日から二十八日までの一週間にわたって実施された延暦寺の兵庫県南部地震のための救援寒行托鉢で、募金百二十万円が拠金され、昨年より好成績を収めた
▽本山仏青の若手一山住職や寺族らによって、震災救援のボランティアが現在も実施されているが、今後は宝塚や芦屋方面にも出向する予定のようだ。

黒住

二千食×50日＝10万食

●兵庫県南部地震における同教団の教会所の被災状況は次の通り。神戸市内の永沢中教会所（藤本昭一郎所長、兵庫区永沢町三ノ二ノ九）と天王中教会所（平野圭三所長、兵庫区上祇園町七ノ一）がほぼ全壊。熊内教会所（元木利和所長、中央区宮本通四ノ六ノ一四）は神殿は残ったが教場が全壊。楠教会所（須磨区北落合二ノ一ノ二三）は比較的小さな被害。神戸中教会所（杉島弘佑所長、中央区花隈町三ノ二八）は新築準備のため建物を取り払っていたため無事。淡路島の久留麻教会所（山内久市所長、津名郡東浦町久留麻一九九二ノ五）と葦原教会所（浜口昭総代、三原郡西淡町松帆塩浜一七）に小さな被害。また、お道づれの中には、自宅が全壊、全焼した人が相当数いる他、死亡者も出ているとのこと

▽岡山市尾上の本部・神道山では、地震発生後その日の内に本部職員ら三人を淡路島に見舞いのために派遣し、翌日からは被災地神戸への救援物資の輸送を開始している。また、十九日までには「ありがとうございます運動」に寄せられていた浄財から救援金として二千万円を拠出することを決めている。一月二十三日からは被災者の避難所となっている兵庫中学校（兵庫区永沢町）に本部職員や一般から募ったボランティア約十人を交代で派遣し、一月二十三日から朝夕の炊き出しを始めた＝写真【写真は省略】。メニューはかす汁、とん汁、のっぺい汁など約五種。日替わりで被災者に提供している。炊き出しは一時的なものとしてではなく、五十日間を目標に取り組みされており、一日約二千食として概算すると五十日間で十萬食となる。炊き出しの世話をしているのは、本部職員と信者の他に本部・神道山に一般から募集したボランティアたち。炊き出し初日の二十三日にはテント設営などのために約三十人が現地入りし準備を行なったが、その後は約十人ずつで奉仕している。黒住宗道教嗣が現地に詰めて先頭に立って奉仕しているとのこと。炊き出しに使う材料も膨大な量になるが、いろんな食材が全国から寄せられており、かす汁に入れる鮭などは北海道からわざわざ届けられているという

▽ボランティアの募集は、新聞記事にもなり岡山県内外に知らされた。募集を知った一般の人達は、日頃から福祉活動に力を入れ、地域に溶け込んだ教団の活動を知っているため、応募しやすかったようだ。また、旭川荘厚生専門学院（岡山市）や柔道整体術の医師など様々な人からの応募があり、炊き出しだけでなく、被災者の看護など様々な活動を行なっていくことになっている。教団関係者の話によると「“させて頂く”という気持ちを大切にしたい。あたり前のことをやっているだけ。また、ボランティアの場が修行の場でもあります」とのこと

▽同教団では、ボランティアと食材の提供、救援金を受け付けている。詳細は、本部・神道山＝電話〇八六（八四）二一二一＝へ

臨黄

次期会長に細井氏

●妙心寺派 ▽博多・聖福寺の山岸善来師家はこのほど地震被災地の神戸を訪問、同市幹部に義援金を寄託した。この義援金は今年五月九～十一日に厳修される聖福寺開創八百年法要の記念事業の一つとして予定されていた“薪能”を中止し、その予算を充てたもの。聖福寺の檀家の一人が神戸市に都市計画課長として勤めているので、同寺で用意した毛布五十枚など支援物資、義援金を送りたいと相談したところ、「今は物資よりも義援金を」という要望があったとのこと

▽山岸師家は一月三十一日に開かれた臨黄合議所理事会に出席して神戸市内の震災被害状況視察の報告を行ない、各本山に防災対策として寺宝収蔵庫の建設を提言した。さらに聖福寺開創八百年法会に際し臨黄各派の管長、総長へ拝請状を送る意向を表明。そのなかで日本臨済禅における栄西禅師の位置に言及し、應燈閑白の法統で占められる現在の臨済禅の宗門において、栄西禅師の然るべき顕彰が欠けていることを指摘するとともに、日本臨済禅の初祖への報恩底を強調し、五月の法会への参列を各派総長に要請した＝写真中央[写真は省略]

▽大本山妙心寺塔頭東林院（西川玄坊住職）は震災被災地の受験生のため、入試の際の宿泊場所を提供する。宿坊の客室に充てている部屋を無料で開放するもの。期間は三月中旬頃まで。和室四室（各六畳）を用意し、宿泊者には朝食も無料で提供する。申し込み、問い合わせは電話で妙心寺東林院へ。TEL〇七五－四六三－一三三四。宿泊日数についても同院に相談のこと。

震災対策緊急理事会開く

●**臨黄合議所** 同合議所の臨時理事会（理事長＝小倉宗徳妙心寺派宗務総長）が一月三十一日、当番会所の大本山妙心寺で開催された。当初、二十日に新年会を兼ねた理事会として開く予定だったが、震災後の対策を協議するため、急遽、緊急理事会に切り替えたもの。各宗派の兵庫県南部地震末寺被災状況、被災者救援に関する情報交換や今後の緊急時対応体制について協議。事務局の禅文化研究所が中心となって、被災情報を収集するとともに、宗門人による救護ボランティアの組織化構想準備などをまとめることを決めた（別項記事参照）

二十五日に定期宗会

●**大徳寺派** 兵庫県南部地震で尼崎市内（第六教区）の末寺二カ寺が被害を受けた。広徳寺（関正明住職）は伽藍が鉄筋コンクリートであったため建物自体に大きなダメージはなく、内部が滅茶苦茶に混乱したという程度だったが、正眼寺（掘尾義明住職）は本堂、庫裡の壁にひびが入り、瓦も落ちたとのこと。両寺には大本山大徳寺から三十万円ずつの見舞金が贈られた

▽また、震災の一般被災者救援のため、大徳僧堂は二日間にわたって市内で托鉢を実施。集められた喜捨六万六千二百三十七円は大本山大徳寺からの百万円、大徳寺塔頭寺院からの二十九万三千円、大徳寺用達会からの十万円とともに地元紙の義援金窓口に寄託された

神社界

神青協も活躍

●**神道青年全国協議会**（西高辻信良宮司）は今回の地震の報に接し、神青協の地震対策本部を神社本庁内に設置、一月十九日から震災地である神戸に入って支援活動を行なっている。神青協は全国に行動力溢れる会員を持つ利点を活かして大阪、明石、そして四国徳島から会員多数が現地入り、被災神社を見舞い、またビニールシートなど必要な物資を配った。そして二十五日から本格的な救援活動を開始し、三方向から現地の要望に応じた物資を運び込んだ

▽また、関西、四国など、各地区単位でも神青協は活発な救援活動を行なっており、震源地で大きな被害のあった淡路島へも四国地区神青協のメンバー五人が二十一日、救援に駆けつけた。一行は北淡町の野島八幡神社、一宮町の伊弉諾神宮などを訪問してビニールシートや水をためるポリタンクなどを届けた。また、倒壊した本殿から御神体を遷す遷座祭、がれきの撤去など、様々な作業に奉仕した

▽この他、神社界の様々な団体を通し、被災地には救援物資が続々と届けられた。一部の地方神社を除いて、一月中に物資は概ね行き渡ったもよう。「今日（二月一日）地震後初めてお風呂に入った」と湊川神社・吉田智朗宮司が語ったように、ガスの供給の遅れなど部の不自由さは残るものの、今後は物資の補給よりも復興への事業が急務となる。特に資金的に難のある小さな神社にとっては大変な作業となりそうで、支援が期待されている。

法華

三千五百万円の義援金

●**日蓮宗** 宗門寺院及び檀信徒に呼び掛けていた兵庫県南部地震の義援金が、宗務院内に設置した「救援対策本部」に続々と集まっているが、一月三十一日現在の集計で、三千五百三万四千二百九十九円に達した

▽最も被害が大きかった神戸市を管内に持つ近畿教区（大阪、京都、滋賀、奈良、和歌山、兵庫の各県の十二管区＝宗務所で構成、教区長＝大塚泰詮兵庫県東部宗務所長）では、地震発生とともに、比較的被害が軽かった大阪府下の各宗務所が即座に対応し、救援にあたった。街頭募金を実施し、集まった義援金約四百万円を大阪府赤十字社に贈った大阪府豊能宗務所（高川法晴所長）のことは、本紙一月二十八日付十二面（兵庫県南部地震特報５）で既報のとおりだが、このほかにも大阪府大阪市宗務所（伊丹栄彰所長）では管内寺院に働きかけ、地震当日には「すぐにでも必要なものを」ということで、おにぎり三百個、水・ウーロン茶のボトル五十本を用意し、翌一月十八日早朝には若手教師二人が車で宗務所（大阪府中央区・雲雷寺）を出発、とりあえず芦屋市の災害対策本部に手渡した。また同十九日には全国日蓮宗青年会（伊丹瑞栄委員長＝伊丹栄彰大阪市宗務所長の子息）でも、地元の大阪日青が中心になって救援活動に立ち上がり、おにぎり千個、水（ボトル入り）などをトラックとワゴン車に積み、同日夜までに芦屋市に届けた

▽一月三十一日と今日二日の二日間にわたり、宗務院で「立教開宗七百五十年慶讃事業懇談会」が開催されたが、これには自らも被災した大塚泰詮兵庫県東部宗務所長（神戸市中央区・本妙院）と中井泰淳・国際開教室長（神戸市灘区・本泉寺）の二人が元気な姿で出席していた。懇談会では冒頭、奥邨正寛宗務総長の導師で、このたびの地震で亡くなった神戸市東灘区・妙見寺の岩田随教住職をはじめ、多くの檀信徒、さらには五千人を超えた犠牲者の増円妙道を祈った。本堂の下敷きになって圧死した妙見寺の岩田随教住職の場合は朝勤中の出来事で、「法衣を着、数珠を握りしめたままの姿で、誠に痛ましい限りであった」（大塚所長の報告）という。大塚所長も地震直後には大混乱で、電話も不通だったことから、実妹の嫁ぎ先である妙見寺の惨状は知るすべもなく、岩田住職の訃報を耳にしたのは二日後のことで、一月十九日に大塚所長自身が遺体安置所を訪れ、枕経を上げて荼毘に付し、仮の葬儀だけは執り行なったという。岩田住職は、京都の故風間随仁氏（上京区・妙栄寺＝正全会OB）のもとで得度し、学生時代は東京・小伝馬町の身延別院から立正大学に通っていたそうで、藤井教雄身延山総務も、いわば“身内”の災難に沈痛な面もちであった。また風間随仁氏の二男で、現在は栃木県宇都宮市・妙正寺住職になっている斎藤邦昭氏（宗会議員＝同心会）は「小さい頃、よく遊んでもらった記憶があり、このたびのことは誠に残念としか言いようがない」と話している。妙見寺は昭和二十年八月の神戸大空襲で全山を焼失しており、今度が二度目の被災になる

▽本紙一月二十六日付十六面の兵庫県南部地震特報４の写真説明中、「神戸市兵庫区の日蓮宗法華寺（内藤慈宣住職）」とあるのは「法蓮寺」の誤りでした。

真言

宇賀住職の復興への声

●**高野山** 兵庫県南部地震で伊丹市の被害も大きい。幸い本堂・庫裡が鉄筋造りで、それも新築されて数年の歳月しか経ていない伊丹市寺本東町五、正覚院（岡部兼海住職）では、小門の倒壊や内陣の荘厳具が崩れた程度で、建物自体の被害はない。このため一月三十一日から、高野山大学のボランティア学生を常時十五人受け入れている。ボランティア学生は正覚院に寝泊まりして、西宮市の中央体育館や市内の小学校に避難している被災者の生活を手伝っている。岡部住職は「被災者がこんなに困っているときはない。できる限りお手伝いをさせていただきたい。ボランティアの学生も実際に現場にきて大地震のむごさを体で体験した。朝は六時頃から出発。夜も遅く帰ってくる。よくやっていただいている」と述べていた

▽「浄徳寺の意地をみせなきゃ。がんばったりします。もう土木工事に入りました」というのは、神戸市須磨区北町一ノ四ノ二八、浄徳寺の宇賀芳樹住職。同寺は本堂が傾斜し、石垣が崩れ、梵鐘が割れた。お墓も液状化現象で土が緩んでいる。宇賀住職は「こんなことで弱音を吐いてはいられません。早速、土木工事に着手。本堂の瓦は全部下ろして今度は銅板葺きにし、傾斜も専門家にみてもらったら何とか修正できるそうだから使用する。梵鐘も手当てをして、今年の除夜の鐘はきつとついてみせます」と勇んでいる

▽故草繁全弘宗務総長、高野山三寶院前住職の遺弟は全国各地で七十人に及ぶが、今回の兵庫県南部地震に際して

六百万の義援金を集めた。三寶院の飛鷹全隆住職のもとにこの義援金が寄せられて、近く飛鷹住職から被災地に届けられる。

ボランティアの状況

▽太融寺（大阪市北区）にあるボランティア本部は教学部が中心となり運営されており、すでに北海道、神奈川、東京、愛知、岐阜、河内、奈良、高野山、丹波、但馬、備前、備中、美作、広島、徳島などの各宗務支所から参加者が集まってきている。もっとも被害が大きかった兵庫支所では青年会が現地の案内に動き回っているようで、同じく淡路支所も独自の救援活動を行なっている。また第三伝道団は伝道団単位で活動しており、青年会単位でも動いているようだ。活動は一般ボランティアと同じだが、斎場での手伝いも多い。とくにボランティアの前線基地の一つ無動寺（神戸市北区）に宿泊している人たちは、近くのひよどり斎場で回向・供養を行なっており、遺体の数が多いため当分続くようだ。他にも人員が継続的に必要なため、「とにかく来てさえくれたら、何らかの仕事はあります」と本部では宗団僧侶に積極的な参加を呼びかけている。

この時期、本山当局が宴会

●醍醐派 京都から僅かに離れた兵庫県南部一帯の惨状は目を覆いたくなるほど悲惨で、これは夢であってほしい、と否定したくなるほどの地獄図である。大地震が発生したあと間もない一月二十二日夕刻から本山当局と御用達組合との互礼会が、京都市内の南禅寺の某料亭で行なわれた、という。宴会には宮川町から芸妓や舞子を入れて大層にぎやかに行なわれたそうである。麻生文雄管長や仲田順和宗務総長も出席。麻生管長の墨跡色紙が御丁寧にも芸妓、舞子らにも配られたという。大地震の発生したあの日以来、京都でも大震災で呻吟する多くの人々に対して義援金や救援の物資が集められ、深い悲しみに包まれている。ホテルや料亭の宴会もほとんどがキャンセルされたり、自粛するところが軒並みに出ている。まして、乾杯の声など発せられないほど、現在でも緊縮した状態がずっと続いている

▽おそらく、醍醐寺御用達組合の人々も心中は穏やかでなかったに違いない。ところが、こういう遊びごとには人一倍熱心な麻生・仲田コンビは自ら自粛や中止の指示を出さなかった。目と鼻の先の大震災に気がとがめない様子でたっぴりと宴会を楽しんでいたという。五千人以上もの死者が出ており、家族を失い、家を失っている三十数万人の人々が避難する惨状を思うにつけ、それに醍醐派の末寺も被災し、住職の尊い命も奪われている現状にありながら宗門のトップがこのていたらくである。大惨事のなかで、きれいどころを呼んでのうのうと楽しんでいた麻生・仲田コンビのことが、いま、各方面からチラチラと伝わり「よくもまあ、この時期に」と、顰蹙を買い、悪評を加えて厳しく非難されているのである。

被災者救援に切り替え

●全真言国際救援機構 同機構（A S I R A）は一月二十五日に理事会を開き、兵庫県南部地震の被災者救援のため百万円を贈ることを決め、宝塚市・中山寺（中山寺派）の被災者救援プロジェクトへ贈った。さらに神戸市須磨区・須磨寺（須磨寺派）を中心にした救援活動へ百万円を贈る方針。救援金贈呈を決めた今理事会は、本来は真言全末寺への同機構への参加呼び掛けの方策などを審議するものだったが、今回の大震災にかんがみ、審議内容を急遽変更。予定していた真言全末寺への参加呼び掛けは五、六月頃に延期した

▽理事らは各本山からの要請で被災者救援に動いているようだ。A S I R A 事務局長の渡井奎一氏（横浜市・高野山真言宗長見寺）も二十二日から二十六日にかけて被災地へ駆けつけ、救援にあたった。神戸市内の寺院を拠点に他のボランティア団体と協力し、炊き出し・物資運搬・病人搬送・死者の回向などを行なった。「炊き出しなど

は、それまで温かいものを食べていなかったのも、たいへん喜ばれた」と救援活動をいったん終えて戻ってきた渡井氏。「被害はひどいの一語。被災者は精神的に参っている状態。そうした中、民間のボランティア団体はすばらしい活躍をしている。しかし、情報不足から救援物資の多い避難所と少ない避難所の差が大きい」とも。

真宗

各教区とも救援に全力

●**本願寺派** 冬の早い夕闇が迫りつつあるJR京都駅前で家路を急ぐ買い物客や会社員らに向かって「兵庫県南部地震救援の募金にご協力をお願いします」と声を限りに募金への協力を呼び掛ける平安中学（藤井和雄校長）の生徒会会員ら。同中学並びに平安高校（藤井校長）では、今回の震災で家屋等を失った被災者を救援しようと中高の生徒会が校内に募金を呼び掛け、また、中学の生徒会と野球部員らが一月三十、三十一の両日にわたり京都駅前で街頭募金を行なった。同校では一連の募金活動で集まった義援金を宗派を通じて兵庫教区（土基謙教教務所長）等へ送ることにしている

▽兵庫教区では今回の地震で阪神間の約八〇%の寺院に被害が出るなど深刻な事態に至っているが、宗派の災害対策本部委員会（委員長＝松村了昌総長）では各教区へ義援金の募集や救援物資の送付、被災寺院の復旧の災害救援派遣員の派遣などを要請しており、これに応じて各教区でも義援金の募集、救援物資の送付を中心とした積極的な救援活動を行なっている。ここに三十一教区並びに沖縄開教地の救援への取り組みについて纏めてみた（本紙取材による）。なお、この活動は二月一日現在のもので、今回は北海道から近畿地方までの十六教区（被災地の兵庫、大阪は除く）の取り組み

▽【北海道教区（立森成芳教務所長）】

▼義援金＝兵庫教区へ教区から三百万円の見舞金を送る。教区内の各寺院等へ義援金の依頼▼人員派遣＝別院、教務所の職員二人を復旧援助のため兵庫教区へ派遣。また、教区の青年僧侶協議会（山階照雄会長）も五日から約一週間にわたり復旧支援のため現地向かう。第一陣は佐々木光明・浄土寺住職以下十四人（龍谷大学生三人を含む）▼今後の検討事項＝高齢者や子供達の被災者を教区内の寺院で受け入れてもらうよう要請

【東北教区（大友大信教務所長）】

▼義援金＝教区内の各寺院に義援金を依頼中▼今後の検討事項＝人的援助等についても今後検討する

【東京教区（池田恵俊教務所長）】

▼義援金＝教区内全寺院に義援金を呼び掛け、一月三十一日までに集まった一千三百万円を本山に送る。今後も順次送金する。被災見舞いの看板、ポスターを作成して築地別院に掲示。別院と共同で別院や和田堀廟所に募金箱設置して参拝者らにも協力を呼び掛けている▼人員派遣＝一月三十一日に第一陣十人を本山へ派遣し、本山の指示で現地へ。二月にも第二陣として別院、教務所職員や教区内の若手僧侶を派遣する

【長野教区（吉井誠昭教務所長）】

▼義援金＝約五百万円の義援金を本山を通じて兵庫教区へ送った。現在、教区内の各寺院へ義援金を依頼中▼救援物資＝青年僧侶連絡協議会が毛布等の物資を長野県庁を通じて被災者に送った▼人員派遣＝青年僧侶連絡協議会の会員約十人が救援支援に現地へ行く。教区の教区内の僧侶、門信徒へボランティアへの参加を呼び掛けている▼今後の検討事項＝ビハール長野（滋野真代表）の会員らによる被災者へのメンタルな面でのボランティア活動

【国府教区（武田智恵教務所長）】

▼義援金＝教区の義援金百万円、寺族婦人会・仏教婦人会の義援金三十万を本山を通じて兵庫教区などへ。各婦人会では今後も義援金を募集▼救援物資＝毛布、布団、タオルケットなどを本山に送付した▼今後の検討事項＝人員の派遣については今後検討する

【新潟教区（西見正教務所長）】

▼義援金＝教区内の各寺院、教化団体に義援金を募集。約四百万円が集まり、このうち先ず二百万円を本山に送付▼救援物資＝各寺院が各々郵便局などを通じて送るよう指導▼人員派遣＝一月二十九日から二月一日まで教務所職

員二人と寺族六人が現地へ復旧支援に。また、今後も要請があれば教区内に呼び掛け、希望者を募る

【富山教区（藤田湛悠教務所長）】

▼義援金＝教区内の寺院や門信徒を対象に義援金を呼び掛けている。また、街頭募金も実施する▼人員派遣＝今後検討する

【高岡教区（龍澤順道教務所長）】

義援金＝教区が三百万円、仏教婦人会が五十万円を各々兵庫教区へ送る。教区は各寺院へ義援金を募集中、仏婦、仏教壮年会など各教化団体でも義援金を募っている▼人員派遣＝教務所職員二人と組長一人が一月三十日から二月一日まで現地へ。また、二月七日から十日まで職員、教区内僧侶が現地へ復旧支援に向かう

【石川教区（藤井純恵教務所長）】

▼義援金＝第一次義援金として仏教婦人会から三十万円、金沢別院参与会から五十万円、教区内六組から二十万円ずつ、合計二百万円を義援金として本山を通じて兵庫教区などへ送る。現在も各寺院、各教化団体に義援金を募集中

【福井教区（石原精樹教務所長）】

▼義援金＝教区内の各組、各教化団体へ義援金を募集中▼今後の検討事項＝基幹運動推進委員会社会部で被災者の受け入れについての検討も

【岐阜教区（野田英隆教務所長）】

▼義援金＝一月三十一日に第一次分の義援金を締め切り、約五百万円を本山へ▼救援物資＝二回に分け、毛布、オムツ、トイレットペーパーなど生活物資を中心に本山や岐阜県庁に送る▼人員派遣＝一月三十日に復旧支援のため十一人を派遣▼今後の検討事項＝受験生の受け入れについて教区内寺院に調査中

【東海教区（鷲山諦住教務所長）】

▼義援金＝教区内の各寺院、各教化団体から寄せられた義援金が約八百万円。このうち五百万円を第一次義援金として本山へ▼救援物資＝水、茶、カイロ、コンロ、トイレットペーパー、下着、薬など各種物資を直接現地へ三度にわけて持って行った▼人員派遣＝仏教壮年会、総代会が中心となり二月十一日から復旧救援のため現地へ▼今後の検討事項＝中部、東海地方の大学短大の受験者を、愛知、三重、岐阜の三県下の寺院等で受け入れたい

【滋賀教区（宮森康雄教務所長）】

▼義援金＝義援金三百万円を本山へ。二月十日をめどに教区内の各寺院、門信徒に義援金を募集中▼救援物資＝教務所職員三人が救援物資を持って現地へ▼今後の検討事項＝被災者受け入れのため教区内の寺院や門信徒に無住の寺院や空き家がないかを調査中▼遺骨＝八幡別院、近松別院、赤野井別院など教区内の六直属寺院では宗派を問わず今回の震災で犠牲となった人達の遺骨を預かることにしており、教務所を窓口として受け付けている

【京都教区（和治教文教務所長）】

▼義援金＝教区内の各寺院等に募集中。一日現在で約四百万円▼人員派遣＝被災寺院の復旧支援のため寺族青年会、仏教青年会の会員らを中心に派遣する。また、仏青は近畿地方の各教区の仏青と協力して一般の被災者のための炊き出しなどボランティア活動を展開中▼被災者受け入れ＝一月二十日に各寺院に被災者の受け入れを依頼、現在五、六カ寺から許諾の回答を得ている

【奈良教区（城厚雄教務所長）】

▼義援金＝教区から兵庫教区へ三百万円、大阪教区へ百万円を義援金として送る。今後も各寺院や各教化団体を通じて義援金を募集する。近鉄大和八木駅で募金活動を行なう▼今後の検討事項＝被災寺院の復旧を支援する人員派遣、被災者の受け入れも検討したい

【和歌山教区（藤下恒庸教務所長）】

▼義援金＝教区内の各寺院、各教化団体へ義援金を募集中▼救援物資＝各寺院などから送られてくる救援物資をストック。本山、現地の要望に応じて送る▼人員派遣＝寺族青年会、仏教青年会の会員を中心に派遣人員を募り登録中。

天理

約八十教会が全壊

●天理教ではこの度の兵庫県南部地震により、神戸市を中心に約八十カ所以上の教会が全壊、百五十カ所以上が半壊するなど、大きな被害を受けた

▽教会本部では、地震発生後、直ちに災害救援対策本部（本部長＝畑林清次表統領）を設置し、翌一月十八日から救援活動に当たっているほか、親里の信者詰所で一万人の被災者を受け入れる旨を兵庫県に伝達。この結果、神戸市から奈良県を通じて三千人規模の受け入れ要請があった

▽一方、徳島教区、香川教区の災害ひのきしん隊は、一月十九日に淡路島に出動。これに奈良教区と和歌山教区の合同隊が合流し、壊滅的な被害を受けた北淡町と一宮町を中心に復旧作業に当たった

▽「憩の家」病院では緊急医療班を被災地に派遣し、神戸市長田区の三カ所の避難所で巡回医療に当たった

▽兵神大教会（神戸市須磨区）では近隣の被災者を多数受け入れ、炊き出しなどが続けられている。地震当日、約二百五十人が避難してきたが、翌十八日には三百人以上に増えた。同教会では鉄筋コンクリート造りの六階建て信者修行所の二階部分が落ち、一階の事務所が全壊したが、被害の小さかった西棟と参拝場を被災者に開放している

▽道昭分教会（神戸市灘区）では地震発生後から約五十人の被災者を受け入れ、教会の家族全員で救助活動を行っている。同分教会では、内外壁や階段などにヒビが入ったが、建物自体は無事だった。

福岡

寒行托鉢の浄財を義援金へ

●真言 福岡県を中心に九州各県の真言宗各派僧侶によって組織している真言宗各派連合真和会（立部祐道会長、事務局・福岡市西区今津八五一、誓願寺内）は一月十九日、恒例の寒行托鉢を行なった。集まった浄財三十六万三千三百八十六円は、兵庫県南部地震の義援金として日本赤十字社へ寄託した。この寒行托鉢は同会が結成されて以来、毎年行なわれているもので今年で十六回目。これまで普賢岳の被災などの義援金としている。十七日は午前九時に福岡市博多区御供所町の真言宗九州教団東長寺（藤田紫雲住職）へ集合。全員が手甲脚絆に網代笠といういでたちで十七人の会員が参加。まず、東長寺で法楽を捧げた後、今年は市内の博多駅方面と西新方面の二手に分かれて街頭に出た。街頭では商店の前で「般若心経」を唱えながら法施＝写真＝【写真は省略】を行ない、法施を受けた市民らは、これに対して財施を行っていた。托鉢は午後二時過ぎまで行なわれ、集まった浄財は日本赤十字社を通じて兵庫県南部地震の被災者へ送られる。托鉢行に参加した僧侶は、「例年と違って、多くの浄財が集まり、自らの寒行が社会のために役立つのなら」と話していた。また、参加者の中には、二月に入って兵庫県南部地震義援金の募金を呼びかけるために博多駅前に立つという僧侶もいた。

広島

被災者への義援金集まる

●本願寺派 広島別院（高橋廣爾輪番）の呼びかけに応じて、安芸教区内壮年僧侶の会・真和会（上園恵水会長）と青年僧侶の会・春秋会（高蔵浩亮会長）は、一月二十六、二十七日の両日、広島市内の繁華街で、兵庫県南部地震被災者への街頭募金を行なった。募金は広島市の中心街にあるデパートのそごう、パルコ、天満屋の前で行ない、二日間で両会の会員約五十人が街頭に立った。両日とも午後二時から二時間、「被災された方々、がんばりんさいよ」と書いた看板を立てて、道行く人に「皆様方の温かいお心をお届けします。よろしくおねがいします」と協力

を呼びかけた。これに呼応して募金する人々の姿が絶えることなく、今回の震災に対する関心の高さを見せていた＝写真。二日間で集まった九十万円余は、中国新聞社会事業団を通じて日赤へ贈られる

▽これに先だって安芸教区（高橋教務所長）では同二十四日、二トントラックとワゴン車に救援物資を積んで、兵庫教区教務所を訪れた。届けたのは十八リットル入りの水六十個、カセットコンロ五十台、ビニールシート百枚、トイレトーパー五千個など。広島別院では引き続き教区内に義援金の協力を呼びかけているが、個人で百万円を寄付した僧侶もいる

▽安芸郡府中町の龍仙寺（武田昭英住職）基幹運動推進委員会（石原二郎会長）は、同三十日、広島別院に震災被災者に対する義援金として、これまでに集まっている三百万円を届けた。合わせて同寺仏教婦人会（野村美保子会長）から二十万円（うち八万円は、既に二十四日の救援物資分に充てられていた）、同仏教壮年会（石田広見会長）から五万円が届けられた。龍仙寺基推委では石原会長が、地震の翌十八日に役員会を招集。「基幹運動の重点項目にある『人々の悩みに応える活動を展開しよう』を実行したい」として、十九日には義援金協力の要請書を門信徒に配布した。これに応じて、一人で十万円を届けた人もいたという。また町内に住む門信徒以外の人々からも、同寺に義援金が届けられている

▽広島市西区草津本町の教専寺（故選一法住職）、浄教寺（今田法雄住職）、西楽寺（篁昭観住職）では三カ寺が協力して、(私たちは五十年前の原爆の惨禍を思い出します。悲しみを共に感じ、心を痛め、目に涙せずにはおれません)と門信徒に募金を呼びかけ、合わせて被災者に届けるメッセージを募っている

▽広島北組（勝岡勝也組長）は四日、広島市安佐北区可部町のスーパーサンリブ前など繁華街の二、三カ所で、午前十時から午後一時から、僧侶と門信徒が協力して街頭募金を行なうことにしている

▽一月二十一日付四面の本欄で、見出しに「緊急見舞金まず三百万円」とありましたが、安芸教区からまず贈られたのは、本文にありますように「五百万円」です。お詫びして訂正いたします。